
徒然なるままにおじさんを書いてみた。

Lolo

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

徒然なるままにおじさんを書いてみた。

【Nコード】

N1346S

【作者名】

Lolo

【あらすじ】

似非好青年と、それに翻弄される叔父が繰り広げる推理劇？

を予定していましたが、無理っぽいので（爆）ジャンル変更します。その他つていまいち判りませんが、ファンタジーじゃないしなア。ましてや恋愛でもないし……。

コンセプトは変わらず、甥っ子に頭を抱えさせられるおじさん（笑）いや、やっぱり甥っ子の方が中心になるか……。

超絶不定期更新です。ワタクシの他の拙作に比べると、やる気が低

ತುಳುಕುಬಿಡು.

可愛くない甥っ子（前書き）

思いつきで始めたものですから、この先どうなる事か。
クスリとでも笑っていただけば……あれ、コメディ？

可愛くない甥っ子

「外間^{とま}！ お手柄じゃないか」

「お前がいると、犯罪者がいなくなつて、俺達の仕事もなくなるかもなあ」

「い、いやあ、それ程でも……」

控えめに頭を下げつつ、俺、外間慎一^{とましんいち}は上司や同輩達の賞賛の言葉をくぐり抜ける。

……こう云つと、俺が非常にクールで能力の高いエリート刑事と思われるだろう。いや、俺に賞賛の言葉を掛けてくれる人はそう思っている。

正直に云おう。今回も、そして前回も……というか、去年の4月から始まった俺の逮捕快進撃は俺の実力ではない。

「あ、叔父さん、お帰りー」

爽やかな声が俺を迎えてくれる。

この、ぱつと見爽やか好青年は俺の甥っ子。姉の息子だ。去年の春、こっちの大学に入学したものだから俺のアパートに下宿を始めた。それはいい。

それはいいんだが……。

「で、どうだった？」

爽やか好青年は、急に爽やかさをかなぐり捨て、エプロン姿のままにやりと笑ってみせる。

「お前の読みはばつちり。今日の午後7時ジャスト、現れた所を逮

捕出来た」

気怠さを隠さず答える、奴よりも30近く年上の俺に、似非好青年はさつと手を差し出す。

「一万円なり」

「判ったよ」

俺は投げるように、叩きつけるように、守銭奴の手に一万円札を置いた。

「いやあ、俺が来て良かったねえ叔父さん」

どこがだコラ。

「家事も推理も出来る優秀な甥っ子なんて、そういないよ」

自分で云うな、と突っ込みたいが、事実なので仕方ない。

この、壮絶可愛くない甥っ子は大学2年生である。名はおおたきれいじ大瀧礼爾。

サークルにも入らず、バイトもせず、毎日何をしているかと云うと、家事と推理である。

家事の腕については、男2人暮らしとは思えぬ整った室内や今も漂っている、悔しいが非常に食欲をそそる美味そうな匂いが物語っている。今日は、煮物か。いや、どうでもいいか。

そして俺の頭が毎日痛い原因は、礼爾の第二の才能である。

この、もうすぐ20になろうという青年は、認めたくないが名探偵である。俺が担当となった事件の詳細を礼爾に話せば、2、3日中に答えが返ってくる。まるで、人気の答案返却システム。いや、ちよつと違うか。

今回も最近、巷を騒がせていた通り魔事件容疑者が次に現れる時刻と場所をピッタリ言い当ててみせた。そこに張り込んでいた俺は、見事、通りがかりのOLにナイフで斬りかかろうとした男を現行犯逮捕、署まで御同行願ったという訳だ。

「叔父さん、最近、頭大丈夫？」

「お前のお陰で、使い道が無くて鈍ってるよ」

「そうじゃなくって、黒いところの面積」

姉の顔が、こいつの頭の後ろにちらついていなければ俺は殺人……
とはいかなくとも、暴行で逮捕されているだろう。

「みそ汁にワカメとか入れてるんだけど。あれ？ 効果無いんだっけ」

「ああ、慥が無いよ。」

それにしてもお前、外でもそんな調子なのか」

すると、礼爾は爽やかに笑った。

「やだなあ！ 猫被ってるに決まってるじゃない。俺も友達は欲しいしさ」

「ああそうかい」

余談だが、こいつはどういう訳かモテる。細っこい身体に、どっかの女優のような髪型、男らしさのカケラも無い顔立ち……最近の女はこういうのが好きなのか？

おかしいな。こいつには俺の血も流れているはずなのに。

まあ、モテるがこいつには彼女がいらない。それがせめてもの救い……

……とか思っている時点で、自分が悲しい。ああ、そうですよ！ まだ、未婚者ですが何か？ 俺は、仕事熱心なのだ！

可愛くない甥っ子（後書き）

おじさんが書きたかったんです。
それだけなんです。

和服美女改め、和服美男

「おじさん、俺、旅行に行くから」

「そうか。誰と？」

俺は何気なくそう聞いた……。

もうすぐ夏休みなのだから、学生同士での旅行を計画していても何ら不思議はない。サークルに入っていないコイツもまあ、友達はいらしいし。驚く事でもないだろう。

だが、その答えに俺はたまげて、聞き返さずにはいられなかったのだった。

「サキさん」

「はあっ!？」

俺の中で一気に様々な考えが駆けめぐった。事件について考えている時でもここまで素早く働くかと云われたら、ちよつと自信が無い。

サキとはきつと、女性の名前だ。そして、ちゃん付けや呼び捨てでない事を考えると年上……。大学の先輩？ いや、しかし大学といえは授業に出ているだけのコイツが上級生と知り合う機会があるのか？ 知り合ったとしても、親しくなる機会があるのか……。？ まさか相手は社会人!？

はつと、相手の顔を見ると麗爾の奴は面白がるように俺を見ている。くつそう。負けたのか……。いや別に、競ってないが。

「俺が社会人女性と旅行すると思ってる？」

「なっ、は……え」

どうして判るの！

「明日、会いに行くから叔父さんも来る？ 非番なんでしょ」

まさかこれが、『親父に紹介（叔父だけだ）』かっ!？

「わ……判った、行く」

麗爾は何がおかしいのか、くすくす笑うと立ち上がった。

「さあて、炊飯器セットして寝よう」と

発言がまるで主婦だな……。

そして、やってきた。運命の翌日。麗爾は、今日は午前中で授業が終わるそうだから午後2時に最寄り駅で待ち合わせる事となった……。

スーツを着るのは流石に意識し過ぎだろうか。夏だし、ワイシャツでいいか。クールビズが流行ってるしな……。

麗爾の奴、俺が刑事という事は話してるのか？ サキさんに会う前に確認しておいた方がいいな。どう名乗れば良いか判断がつかん。身内が警察組織にいるというのは、隠す事が多いからな、うん。ああ、サキさんの上の名前も聞いておかなければ。いきなり下の名前で呼んでは失礼だ。

ああやれやれ。非番の日なのに、こんなに気苦労が多いなんて。

さて、午後2時。

悪気があるのか無いのか……いや、あるのだろうが若者向けの小洒落たカフェを待ち合わせ場所に指定した上、5分程遅れてやってきた。

「ごめんごめん！ 電車の時間に間に合わなくって！」

善人ぶった微笑みで、目の前で手を合わせながら駆け寄ってきた。

「じゃあ行くか？」

「うん」

麗爾の頼みで、車で来ている。どうも、交通の便が悪いところにサキさんは住んでいるらしい。……というか、いきなりお宅訪問というのは気が引けるが……こういうものなのか？

「そこ曲がつて」

「ああ……本当に、駅から遠いな。一人住まいなのか？」

「そうそう。もう7年近いつてさ」

「7年……」

大学生から一人住まいを始めたとしても、大体26歳……。ちよつと年の差がありすぎるんじゃないか？ああでも、男の方が寿命が短いから……いや、結婚するという話では無かった。いけないいけない。

それにしても、だ。

この辺りに、女性が一人で住むようなマンション・アパートは無いはずだ。古い建物が目立つ、静かな住宅街。時々ある店も、どこにでも蔓延るコンビニや古くさい煙草屋、これまた古くさい本屋などばかり。

「ここだよ」

「ここ！？」

俺は、思わず顔をしかめた。

ぼろいアパートではない。超高級住宅だったのでもない。

そこは、古き良き日本の香り漂う和風建築の一軒家だった。そして、門の向こうに見える建物の1階部分は何と書棚で埋め尽くされている……古本屋だ。

そこから、誰かが出て来た。

「ああ、麗君、よく来たね」

和服美人……。だ。浴衣を着た、女性にしては少し背の高い人物。最近では珍しいくらい、真つ黒な髪で長さは肩まである。ほっそりした顔のラインで、鋭いが美しく魅力的な瞳。ゆっくりこちらへ歩いてくる……。

あれ？

待てよ。色白で痩せ形、顔立ちも非常に美しい……が、どう考えても女性の体型じゃないぞ？！

「初めまして。麗君からお話しは伺っていますよ。

私は佐木悠斗さきゆうとと申します」

後ろで麗爾が、笑っている。

何だこれはっ！！

古本屋店主

「おじさん、佐木さんの事、女だと勘違いしてたんだよ」

麗爾がいきなり、恥ずかしい事を暴露する。

「おや？」

「い、いやあ。麗爾がサキさんと云うものですから、下の名前かと思つて、あはは」

麗爾とは違つて、相当に人が好いらしい佐木は親切に微笑んだ。

「それは無理ありませんね。」

時々、顔を見ても間違われますから」

やっぱりそうか。座っていたら確かに、判らなかつたかもしれない。浴衣一枚でなく、上に何か羽織っていたら余計判らなかつたはずだ。

「まあ、中へどうぞ。暑いですからね」

佐木に従つて、俺と麗爾は店内へ。

「仲がよろしいんですね」

店の奥、一段高くなつたところにある和室に通された我々に佐木は茶を淹れてくれながら云つた。

「は？」

「外間さんと麗君。」

『おじさんを連れてきてもいい？』なんて云うので、驚きました」

「あはは……」

佐木は知らないのだろう。

麗爾は単に、俺の勘違いを面白がつて、徹底的に驚かせてやろうと思いついただけのはずだ。こいつはそういう性格である……甥っ子について言つ事じゃない氣もするが。

「旅行に行くと言つてましてけど、どちらへ？」

「望蟬島、ご存じですか？」

俺が首を傾げると、麗爾が説明する。

「種子島から東に30キロくらいにある孤島で、佐木さんの友達の家が所有してるんだって」

孤島でバカンスとは、羨ましいじゃないか学生の分際で……。

「毎年、家族で行っているらしいのですが今年はご両親の都合がつかず、ご祖父母はもう体力的に行くのが難しいという事らしいのでヒマを持て余している私が誘われた訳ですよ」

「成る程」

ヒマなのか。

まあ確かに、悪いがこの古本屋が繁盛しているとは思えない。それで生活しているという事は、どういことなんだろう？ 聞くのは不躰だが。家が金持ちとか？ 副業をやってるとか？

「おじさんも来る？」

「何を云ってるんだ。仕事がある！」

すると、意味深に麗爾は笑う。

「有給休暇使っちゃえ。どうせ、俺がいないと仕事にならないでしょ？」

「~~~~~」

それがあつた……！

悔しいが。ひじょーうに悔しいが、こいつの言う事は尤もだ。

麗爾がいない間、俺は別人となってしまう……というか元に戻ってしまうのだ。いや、麗爾が来る以前に戻るだけなんだから何も心配は無い！ ……と言い切れない悲しさがここにはある。

「だが、佐木さんにもご迷惑が」

「私は構いませんよ。」

友人……笹塚というのですが、彼は様々な年代の方へ声を掛けていると言いますし」

若い連中ばかりで息が詰まる、という事は起こらない訳か。
しかしなあ……。

すると、麗爾がぬつと顔を近づけてくる。

「笹塚さんのお姉さん、凄い美人なんだって」

「よし、行こう」

反射的に答えたのが、この上なく恥ずかしい。

しょうがない。これは、しょうがない。おっさんとはこういう生き物だ。自分で言うのは随分悲しいな。

「8月最初の土曜日から一週間、滞在させてもらう予定です」

佐木は、麗爾の言った事が聞こえなかったのか気を遣って知らんぷりしているのか、優雅に微笑んでそう言った。

全く……今の若者に優雅なんていう言葉が似合うのがあるとはなあ。しかも男性……。

船上でお喋り

【外間】

8月の第一土曜日。

現在、海の上だ。8月らしく、暑い。ほんつとくに暑い……猛暑日だな、こりや。雲さえないし。

という事で、些か年寄りの俺は船室で熱中症にならんように涼んでいる。麗爾と佐木は、空港で合流した佐木の元同級生のおおかわちひろおおかわちひろの大河千尋とデッキに出ている。ちなみに、千尋は男である。厄介な名前が、どうしてこう、多いかな。だが少なくとも、大河を見て性別を悩む事は起こりえない。明らかに体育会系の体つきで、真つ黒に日焼けしている。サーフィンが趣味というが、納得だ。

あと、3時間くらいというから昼寝でもするか。船酔いが、ちょっと酷くなってきたし。

【麗爾】

しっかし、この人デカイなあ。これで千尋っていうんだから、笑っちゃうね。

「何だ、麗爾、にやにやして」

うーん、声もすつごく渋いし。

「いやいやあ、何でもないですよ。千尋さんゴツイなあと思って」
相手は豪快に笑う。

「お前や悠斗が細っこいだけだろ！」

「そうですかね？」

何だか、俺、この人好きだな。自分で言うのもなんだけど、結構珍しい。流石、佐木さんの友人だね。タイプは全く逆なんだけど……

…。ジーンズに真つ赤なＴシャツって格好。シャツから突き出してる腕の筋肉が、レスラーかっという程凄い。これで、会社員やってるっていうから判らないよね。ちょっと長めの金髪を結んでて、更に怖い感じになってる。この人には下手な事言うと、冗談じゃない事になりそうだから……。この人の前では良い子でいようと決心。

「お前と初めて会った時さ、女子かと思ったっけ」

千尋さんが佐木さんを見て言った。

「こいつ、昔っからこんな小さっこい体つきでな。顔も女顔だったし」

「女顔って……」

佐木さんがちよつと、眉間に皺を寄せた。こうやっても格好いい。てか、美人だ。

そういえば、和服じゃない佐木さん、初めて見たな。黒いロングパツに、白いワイシャツ、黒のベスト。……うーん、何でこんなにシンプルなのに格好いいわけ？ モデルかって話だよ。モデルというより、こんなアーティストがいそうだな。そういうの、詳しくないけど。

「昔かあ。佐木さん、もてたでしょ？」

俺が言うと、佐木さんは

「まさか」

だつて。

「会話する事も無かつたかな……」

「それは、お前が難しい顔で難しい本読んだりしてたからだつて。あと、あんまりにも佐木君がお綺麗だから、相手にしてもらえないと思われたんじゃないか？」

千尋さんがやりとしながら言う。

「お綺麗なんて言われても、莫迦にされてる気しかないなあ」
不服そうな佐木さん。まあでも、確かにこのシルエットと顔は、

格好いい”じゃなくて“綺麗”だ。

「ま、俺はごつ過ぎたから勝手に不良だと思われて、引かれてんだから人の事は言えないわな」

と、豪快に笑う千尋さん。

「2人を足して2で割ると、丁度良さそうですね」

俺が率直な感想を述べると、二人とも苦笑しつつ頷いた。

「そっいゃ、今回のメンバーは麗爾が最年少か？」

ちよつと間があつて、それから千尋さんが言つと佐木さんは首を傾げた。

「笹塚の従妹が来るそうだよ。結構年下らしいけど、幾つなんだろうな」

それを聞いた千尋さんは俺を見て、にっとした。

「夏の恋が来るかもしれないぞ？ 笹塚家の女は美人が多いから」

「あはは、無いと思いますよ。俺、第一印象で通る期間が終わると途端に距離を置かれるタイプですから。一週間後には、目も合わせてもらえないかも」

「それって、性格が悪い奴の典型じゃないか！」

「ははっ」

俺も、それから千尋さんも笑ってるけど冗談でも何でもないんだ。廊下ですれ違った事しかないような女の子からは、結構バレンタインチョコとか貰えるけどクラスの子からは貰った事ない（笑）。そんなに口は悪くないと思うけど……あ、でもおじさんには言い方に気を付けろって良く言われるっけ。参考にしておこう。

1 日目＊紹介（前書き）

一生放っておくと自分でも思っていましたけど。書けば書けるもんです。

1日目*紹介

【麗爾】

さて、着いた。まさに南の孤島だなあ。佐木さんの説明によると、島の外側はぐると砂浜になってるらしくて。歩いて1時間ちよつとで一周できるらしい。砂浜から木製の……悪いけど古くさい船着き場が伸びていて、すぐ目の前はちよつとした林になってる。熱帯っぽい木が多いな、やつぱり。

「もう少し西に寄ったところに道があるそうです」

佐木さんが招待状……まあ、簡単な手紙を見直しながら指さした方へ俺達は続いた。

先頭に行く佐木さんは勿論、千尋さんも（当然俺も）元気だけとおじさんは船酔いの後遺症があるみたい。白昼のゾンビみたいな顔してる。

佐木さんに従っていくと、確かに舗装された一本道が見えた。舗装された……とはいっても、慰め程度ね。木が無くて、草が取り払われてるっただけ。ま、獣道に近いかな。そして流石小さな島。道に入るとすぐ、遠目に建物が見えた。ロジミみたいなものを想像してたんだけど、これがなかなか立派な建物で。旅館みたいだなー。白い壁の建物で、こちらを向いてる入り口には洒落た階段がついてる。両脇に植木鉢があつて、どうやら花盛りみたいなんだけど……俺、植物興味ないからなー。佐木さんが知ってそうだから後で聞いてみるか。赤とピンク色で統一されてて、見栄えが良いのは確か。建物の広さかというと……対象物が無いから判りづらいけど、佐木さんの古本屋の1.5倍くらい。3階建てかな？ 屋根裏もありそう……。10人から20人は楽に生活できそうだね。ええと、今回集まるのが俺を含めて10人。丁度良い感じかな。招待者の笹塚さ

ホスト

んと姉、その父親の妹夫婦と娘。俺達のまだ会ってない招待客の江賀さんっていうこれまた佐木さんたちの同級生。で、俺達4人の合計10人。

俺達が建物近くにまで行くと、気付いたのか中から人が出て来た。眼鏡の優しそうな印象の人……これが笹塚さんかな？ 痩せ形だけど、不健康な印象じゃない。笑顔も滲刺してるし。案外、アウトドアとかで活躍するタイプかも。釣りとか好きそう。まあ、ぱっと見だけ。

「悠斗、千尋、久し振りだね。突然呼び出すような真似をして申し訳ない」

「気にしないでいいよ。外間さん、麗爾くん、こちらが招待主の笹塚」

当たりみたい。

「初めまして外間です。図々しくお邪魔して申し訳ありません」

「外間の甥の大瀧麗爾です。よろしくお願いします」

「こちらこそ、来てくださってありがとうございます。想像よりずっと賑やかになりそうで嬉しいですよ。笹塚肇と申します」

「につこりすると本っ当に人が好きそうだな。確実にいい人なんだろうな。」

「もう1人の客人……江賀はまだなのですが。私の姉と従妹、それからその両親は集まっていますので。どうぞ入ってください、中で紹介しますから」

広い玄関からすぐ廊下に繋がっていて、今はドアが開かれてるから向こうにリビングみたいな部屋が見える。リビングというより、ホールと呼びたい感じ。フローリングで、大きな窓の側には小さめのテーブルと椅子が幾つか。中央には食卓と思われる大きめの長方形のテーブルがあり、奥にはテレビ台もある。窓際の椅子に若い女の人が2人、食卓のところにおじさんより若いくらいの男女。多分、

窓際の2人が肇さんの姉と従妹、食卓の方がご夫婦かな？

ちなみに、これも当たった。

「ああ、遠いところお疲れ様です。初めまして。吉村幸介です」

立ち上がった中年男性。ちょっとお腹が出てる、明るい雰囲気の人。顔も丸くて、蹴飛ばしたらころころ行きそうだな……っと、間違っても口には出せないぞ。

「こっちが、妻の恵」

「初めまして。短い間ですけど、仲良くやりましょう」

品の良いご婦人って感じかな。体格はまあ、普通。顔立ちは、綺麗に入るのかな。娘さんが俺と同じ年頃って事は、若くても40近辺だけどそうは見えない。

あと2人の紹介は肇さんが引き継いだ。

「あっちが、姉の美咲と従妹の絢です」

「弟の思いつきで。無理矢理お誘いして申し訳ありませんでした。ごゆっくりしていただくさいね」

やわらかに微笑んだのが美咲さん。確かに美人だね、笹塚家の女性は（千尋さん談）。笑顔の種類は肇さんによく似てるね。一切邪が無い。体格の方は、ちょっと不健康そうかも？ 最近の人はこれくらいが普通なのかな！。

「絢です。初めまして」

言葉少なに言ったのが絢さん、と。遺伝の気まぐれかな。母の恵さんより、従姉の美咲さんに似てる。人見知りの性格なのか、すぐに俺達からは目を反らしちゃった。その年で佐木さんに魅了されないとは、なかなかやるな。

その後、肇さんが俺達の事も紹介してくれて、とりあえず後から来た4人は食卓テーブルの椅子へ。美咲さんが

「お茶を持ってきますね」

と部屋の奥、右側に入ってしまった。あそこがキッチンなのかな？

迷惑がられなかったら、お礼に料理でも作ろうかなあ。おじさんはどうせ、何の役にも立たないから（笑）。

1日目＊暗転

【外間】

「遅いな」

笹塚肇が呟く。江賀という人の事を言っているのだろう。

確かにもう夕方を過ぎて、恵と美咲が夕食の支度をしている……。

「今日、到着の予定なんですよね？」

麗爾の確認に、肇は頷いて説明を。

「今朝、確かに船が一旦遅れるという連絡はあったんだけどねえ……。

でも、それでも数時間前には着いていてもおかしくないんだ」

「まさか迷ってはいないですね？」

俺が言つと、

「多分」

との返答。

「港は一箇所ですし、そこからの行き方も説明しておきましたからね。そうだ、幸介さんと千尋は海岸まで歩いてきたんだっただね？」

船なんかは……」

幸介と千尋は顔を見合わせて、否定する。

「影も形も」

ここには、電話線など張られていないから当然、連絡不可能。携帯も圏外である。

「天気も安定してるしなあ」

肇は、大きな窓から外を見る。

波は穏やか。ラジオの天気予報によると、ここ数日好天が続くらしい。

結局、夕食が運ばれてきて話は中断。待つしかないな、ということになった。

「恵さん、姉さん……張り切り過ぎだろ」

肇が呆れて笑ったのも無理はない。最後の晚餐もかくやという程、テーブル一杯に料理が並べられる。冷蔵庫・冷凍庫がきちんと整備されているそうで肉や魚もかなり持つてきたという。食事に飽きる事はなさそうだ。

「だって、ステキな殿方がたくさんいらっしやるんだもの」

恵さんは特に悠斗にウィンクして、彼を困らせる。意外と、茶目っ気のある性格らしい。

「年寄りにそんな事されても、佐木君が気を悪くするだけだぞ」

「あら、あなた、失礼ね！ 私が年寄りなら、それより年上のあなたはおじいさんじゃないの」

何だか、明るい夫婦である。仲良さそうだ。

「江賀さん、心配ねえ」

しばらく食べ進めていると、ふと思いついたように恵が言う。肇は、我々に食前にしたのと同じ説明を繰り返した。

「洋一は時間にルーズな性格じゃないはずなんだけどな」

千尋の呟きに、肇と悠斗が頷く。

「江賀さんも、3人の同級生というわけですか」

俺が言うと、一斉に頷いた。

「俺は大学も一緒だったんですよ」

肇が付け加える。

「卒業後も、何だかんだと一緒に食事したりと友人関係も続いてて、仲が良かったに心配なのだろう。人の好きそうな顔に、少ししわを作っている。」

そこで、ふと麗爾が大人しいなと思ってみやると……。

主婦かいつ。何故、男子学生が主婦の恵と唐揚げの美味しい作り方について話し合っているのだ。偏見だろうか？ かしななか、変

だ。平均的な男子学生なら、トップレベルの美人2人の方と接触を持とうとするのではないか？ いや、それは俺が古い人間だからそう思うだけか？

「じゃあ、行きましようか」

どうしても気になる、心配だという事で。落ち着かない肇を筆頭に食後、浜の方まで行くことになった。

「食後の運動にも丁度いいでしょう」

と冗談めかしていたが、目があまり笑えていなかった。

搜索メンバーとしては、江賀洋一の友人3名と麗爾、それから驚いたのだが……絢も着いていくというのでその5人。美咲と、中年3人は食後の運動より食後の休憩を選んだ。

【麗爾】

「この狭い島で迷う事はないと思うんだけどね」

肇さんは、何度もそう言ってる。ちなみに、俺も全面的に同意する。この島を隅から隅まで回ったとしても、3時間くらいあれば事足りるし。

「船の最終便が夕方の4時だったね。ここまで、ざっと3時間……今日の船に乗れていれば、既に着いているはずかな」

佐木さんが言う。ていうか

「よく覚えてますねー、相変わらず」

記憶力が、大変よろしいこの人。

「連絡手段が無いってのが困るな」

千尋さんが、最大の問題点を言う。

そつ、携帯さえつながれば何の問題もない。文明のありがたみがや
つと判ったよ。

「無線はでも、繋がるんですね？」

絢……さんが言う。どう呼ぶのか、非常に困る。同じ年らしいんだ
けど、女の子を名前で呼ぶとかやったことないしな。でも、名字
で呼ぶと吉村さんが3人いるから面倒。やっぱ、ベタに「絢さん」
か。

「うん。だから、朝になったら向こうの港に連絡をとってみるよ」

「肇さん、無線使えるんですか」

やっぱ、アウトドア系だ！。

「うん。親父に教え込まれたんだよ。子供の時からこの島には来て
たからね」

「ああ、いざという時に使えるのが1人だと面倒ですからねえ」

「そういう事」

「あれ？ でも、今は」

「姉さんが出来る。あれ、理系なんだよ」

ちよつと意外だ。フランス文学とかやってそうなのに（笑）。

「メカは俺よりずつと強いよ。ここに着いた直後の、電気製品の整
備はぜーんぶ姉さんの仕事。俺は箒かけ」

笑いながら言う肇さん。

だけど、笑ってたのはそこまでだった。

「おい」

千尋さんが、立ち止まった。

「あれ……」

そこには、黒い塊があった。

黒い塊は、どう考えても大人1人ぶんの大きさはある。何だか、背筋が冷たくなってきた。

まさかね。

でも……。

千尋さんが駆け寄って、黒い塊の横にしゃがみ込んだ。慌てて、俺達も続く。

「冗談だろ、おい」

「どうしたんだよ、千尋！」

肇さんが言うと、千尋さんが立ち上がった。

今日は晴れている。月がよく見えていて、その明かりで千尋さんの血色の良い日に焼けた顔も真っ青に見える。いや、本当に真っ青になったのかも。

「洋一だ。」

……息してない」

ひゅつと息を吸う音がしたと思うと、肇さんが卒倒した。慌てて俺が支える。

「洋一……」

手を伸ばす千尋さんを止めたのは、絢さんだった。

「触らない方がいいです」

「な……」

「ここに残っていてください。皆さんを呼んできます。外間さんは刑事さんなんですよね」

俺は頷いた。

「対応を決めてもらいましょう」

かなり、この子は冷静だ。まるで、慣れているみたいだ。

「じゃあ、佐木さん、着いていってあげてください。ここは俺と千尋さんが見張ってます」

「判った。行こう」

「はい」

暗いから、どうしてこの人……江賀さんが倒れているのかは判らない。

真っ黒な髪、黒いシャツに黒いジーンズだから黒い塊に見えたんだな。水も被ってるし。溺死？ でも、足を踏み外すような場所もこの辺りには無いはずだ。この格好で泳ぐはずもない。船が転覆したなんていう特殊なケースがあつたならまあ、別だけど。そんな事は多分、無い。こんな良い天気で船が沈むわけがない。人類史開闢直後の木製の小舟じゃないんだから。

「麗爾、本当に、死んでると思うか……？」

「判りません、けど。こういう場合、下手に動くと疑われますよ」

「まさか、だから絢ちゃんに悠斗と一緒に行かせたのか」

この状況で、そこに気を遣ってる俺に呆れたのと感心したのと半々くらい。半分、感心なら上出来かな。

「まあ、刑事の甥ですから。

うちの叔父はともかく、頭に来る刑事は多いですからね。こういう場面で、被害者に触れたり、1人になったら駄目です。

ここでは、俺と千尋さんが、肇さんは速攻気を失ったという証人に俺が千尋さんは何もしていないという証人に。千尋さんが俺は何もしていないという証人になる訳です」

「はあ……」

千尋さんは、座り込んでしまった。

「お前と外間さんに任せるよ」

「『外間さんに』、じゃないんですか？」

「外間さん、なんか頼りない気がするんだけど、……失礼か？」

「察しの通りです」

1日目＊推理小説じゃないんだから

【外間】

「あら、絢、佐木さん。お帰りなさい……どうしたの？」

恵が小首を傾げた。

和やかに茶を飲んでいた我々。そこへ、戻ってきた絢と悠斗はどう考えても散策からだ帰ってきたという様子ではない。

「外間さん……来て頂きたいのですが」

悠斗。

「どうしたんです」

幸介が、どこか青白い顔の2人を不安そうに見る。次に絢が発した言葉に、皆、愕然とした。

「江賀さんが、亡くなっているようです」

俺は、即刻立ち上がった。

「本当ですか!？」

きつちりと頷く絢。

「我々が、浜に出たところ、倒れていて……千尋が側に行ったところ、息をしていないと」

悠斗が説明する。

「そんな……まさか……」

「どうして」

動揺している幸介と恵。美咲は何とか、平静を保っているようなのでここは任せる事にしよう。

「みなさんはここを動かさないでください。出来れば、無線で警察に連絡を。それから、懐中電灯などありますか」

美咲が頷いた。

「待っていてください」

と階段を駆け上がり、2つの大型の懐中電灯を持ってきた。受け取って、一方を悠斗に渡しておく。

「佐木さん、絢さん、案内してください」

「ええ」

何という事だろう。

孤島で死人だと……？ 推理小説じゃあないんだ。

せめて事故であってくれと願いながら、俺は第一発見者の2人に続いた……。

「どんな様子でしたか」

「海の方を足にして、俯せた状態でした。暗いので判然としませんが……濡れていたようです」

「溺死……？」

「それは何とも」

そこで、絢が口を挟む。

「違うんじゃないでしょうか」

俺は驚いて見てしまう。

「溺死なら、もっと……その、死体は滅茶苦茶になるのでは？」

悠斗が、「なるほど」と。

「確かに、そうです。」

倒れたところに、水を被せられたという方が、まだ判る様子でした。これも、暗いので確かではありませんが服の乱れも特に無かったようです。

鑑識のような2人だな、全く。

「現場には残りの3人が？」

「はい。肇が気を失ってしまったので。麗君と千尋が残っています」

「そうですか……」

余計な事を始めるなよ、麗爾！

ほんつとに、推理小説じゃないんだから！！

【麗爾】

ああ、佐木さん達が戻ってきた。

「叔父さん、こっち！」

他の人は来なかったみたいだな。まあ、その方がいいか。気絶者がもう1人増えても困るしね。恵さんとか心配だ。

「まだ、誰も触ってない」

叔父さんと佐木さんが持っている懐中電灯で、黒い影のようだった江賀さん……らしい死体を照らす。

「間違いなく、江賀です」

佐木さんが保証した。

「本当に、外傷が無いな」

叔父さんは言つて、手を合わせてから江賀さんの身体を仰向けにした。

「服も破れているところが無いし……」

「ねえ、叔父さん」

1つ、気付きました。

「背中はずしょぬれだったけど。表はあんまり濡れてないね」

「……確かに。外気に触れてる背中側の方が、乾きやすいはずなんだがなあ」

「倒れた後、水が掛かったとしか考えられないよね。」

問題は、“掛かった”か“掛けた”か、だけだ

「おい、麗爾」

叔父さんは咎めるけど。

こんな場所で、溺死でもなく、怪我をした訳でもなく倒れてるんだよ？ 何かあったんじゃないかと、何かされたと考える方が自然じゃない？ 叔父さんは、当然の質問をする。

「佐木さん、大河さん。こちら、江賀さんに持病などは？ 心臓が弱いとか」

「聞いたことはありません」

すぐに応える佐木さん。

昔から病弱で、心臓が弱くて……だったら、どれだけあっさり事が片付くか。

「肇の方がよく知っているでしょうが……麗君？」

「もうちよつと、無理そうですね」

こんなに見事に気を失うなんてね。相当、仲が良かったのかな。

「誰か、布か手袋なんかは……」

あ、持つてるよー。

「ハンカチならあるよ」

「ちよつと貸してくれ」

いつもなら、女学生か！ とかいうツツコミが入るけど、そりゃ今はそんな場合じゃない。

「申し訳ないですが、佐木さんと……じゃあ大河さん」

俺が肇さんを支えてるのを見て指名した。

「懐中電灯で私の手元を照らしてもらえますか」

「判りました」

覗きに行けないのが残念だな。

叔父さん、何か見落とさなければいいけど。え？ 失礼だつて？

だって、【うっかり】と書いて【外間慎一】と読むんだから。

「衣服の破損はなし、血痕も無い……」

目を調べてもやはり、死亡を確認する事になった。それで、江賀さんの全身を調べたんだけど、何も出ない。

「叔父さん、頭は？」

「特に傷は……」

「髪に隠れてるところは」

叔父さんは衝撃的な顔で振り返って、

「今調べようとしてたんだ！」

と答えた。うーん、内心が丸見え。

「これは……」

叔父さんが呟いた。

佐木さんも見えたらしい。何だ、何だ？

「打撲痕……というやつですか」

佐木さんに、叔父さんは頷いた。

「これが死因かどうかは、まだ何とも言えないですけどね」

「ぶつけた傷ではなさそうですね」

あ、吃驚した！ 絢さん、そんなところに。ほんとに物怖じしない人だなー。

「傷の場所といい……狙ってつけられた傷のように見えます」

と、佐木さん。

「あ、ああ……そうですね」

叔父さん、形無しだー。

「凶器なんて、転がってるわけではないな」

千尋さんが言う。そうだね。

「この場所なら、海に放り投げてる可能性の方が高いですね。隠すよりずっと安全・確実ですから」

「麗君、代わるうか」

佐木さんがさりげなく言ってくれた。

いやあ。この人って判ってるなー！ だから大好き。ああ、変な意味じゃないよ？

「済みません」

「なら俺が。悠斗は麗爾より力ないだろうが」

という事で、千尋さんと肇さんの支えをバトンタッチして鑑識グループに加わった。

「変な傷ですね。天然のもので付けられたんじゃないかなさそうだ」
説明すると。

直径1センチくらいのすこし輪郭がぼやけた丸い形の痕。これで人が死ぬのか……と思うんだけど。当たり所ってやつなのか。テーブルの角でもぶつけかたが悪いと命に関わるし……おかしくはないかで、気になったのが。

「この痣は何でしょうね」

丸い痕から左右に伸びる、短い線。同じく打撲痕だと思うんだけど。ん？

「佐木さん、どうしました？」

一瞬だけど、佐木さんが凄く難しい顔してたような。視線は生憎辿れなかった。

「いや、何でもない。思い過ごしかな」

「……後でこっそり教えてくださいね」

割と本気で言うと、佐木さんは苦笑した。

「こっそりの約束を堂々を取りつけるのもおかしい話だね」

ま、いいじゃないですか。

俺と佐木さんの仲だし（笑）。繰り返すけど、変な意味じゃない。

1日目＊推理小説じゃないんだから（後書き）

麗君が平然とし過ぎてますけど。

まあ、いいよね。

適当がモットーだ。この話においては。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1346s/>

徒然なるままにおじさんを書いてみた。

2011年12月2日20時48分発行